

【問題】（演習）

出典：『孔子家語』「卷第五 在厄篇」／ 東北大學 98年

書き下し文

孔子陳蔡に厄めらる。従者七日食らはず。子貢齋らす所の貨を以て窃かに匂を犯して出づ。糴せんことを野人に告げて、米一石を得たり。顏回・仲由之を壞屋の下に炊ぐ。埃墨有りて飯中に墮つ。顏回取りて之を食らふ。子貢井より之を望見し悦ばず、以て食を窃むと為すなり。入りて孔子に問ひて曰はく、「仁人廉士も窮すれば節を改むるか」と。孔子曰はく、「節を改むれば即ち何ぞ仁廉と稱せんや」と。子貢曰はく、「回のごときや、其れ節を改めざるか」と。子曰はく、「然り」と。子貢飯らふ所を以て孔子に告ぐ。子曰はく、「吾の回の仁たるを信ずるや久し。汝云ふこと有りと雖も、以て疑はざるなり。其れ或いは必ず故有るか。汝止めよ。吾將に之を問はんとす」と。顏回を召して曰はく、「疇昔予夢に先人を見る。豈我を啓祐する或らんか。子炊ぎて飯を進めよ。吾將に進めんとす」と。対へて曰はく、「向に埃墨有りて飯中に墮つ。之を置かんと欲すれば則ち潔からず、之を棄てんと欲すれば則ち惜しむべし。即ち之を食らふ。祭るべからざるなり」と。孔子曰はく、「然るか。吾も亦た之を食らはん」と。顏回出づ。孔子顧て二三子に謂ひて曰はく、「吾の回を信するや、特に今日のみに非ざるなり」と。

現代語訳

孔子は（遊説の旅の途中）陳の国と蔡の国あたりで両国の軍に囲まれ、食料も途絶えて、大変な苦しみを味わった。（そんな状況の中で）お供の者たちは、七日間も食事をとることができなかつた。（そこで）子貢は、旅に備えて持つて来ておいたお金を持って、つそりとその包囲網を破つて脱け出した。（そして）農夫に米を買いたいと頼みこんで、一石〔＝約十九・四リットル〕ほどの米を手に入れ（て帰つて来）た。（そこで）顏回と仲由は、その手に入れた米を壊れた家の軒下で炊いた。（すると）ご飯の中にはこりやすすが落

ちた。（すると）顔回は、そのほこりやすすが落ちたご飯をつまんで食べた。子貢は、（その様子を）遠くの井戸の所から眺めていて不愉快になり、（顔回が）盗み食いをしたのだと思った。（そこで、子貢は部屋に）入つていって、孔子に尋ねて言つた、「仁人〔＝仁徳を備えて情け深い人〕や、廉士〔＝欲がなくて心が清らかな人〕でも、困窮すると節操を変えてしまうものでしようか」と。孔子が答えた、「節操を変えてしまつたら、どうして仁人・廉士とは言えない」と。子貢が言つた、「顔回のようないい人物は、節操を変えたりしないのでしようか」と。孔子が答えた、「その通りだ」と。（そこで）子貢は、（顔回が）ご飯を盗み食いしたことを孔子に話した。（すると）孔子は言つた、「私は、顔回が仁徳を備えて情け深い人間であることを、ずっと以前から信じてきた。おまえが、そういうことを言つても、（私は、顔回の人間性を）疑つたりはしないよ。（顔回がそうしたのには）何か、必ず理由があつたのだろう。おまえは、（もう、この件についてとやかく言うのを）やめなさい。私が、その辺の事情を尋ねてみよう」と。（そして、孔子は）顔回を呼び寄せて言つた、「昨日、私は亡き父を夢に見た。なんと私に危機脱出のお告げを下そうとしておられるのだろうか。君は、ご飯を炊いて（いたそしだが、そのご飯を）お供えしてくれ。私は（亡父の靈を）祭るうと思う（から）」と。（顔回は）答えて言つた、「さきほど、ほこりやすすが、ご飯の中に落ちました。そのほこりやすすが落ちたご飯を、そのまま（食卓に）並べたならば、きたないでしようし、（だからといって）そのご飯を捨ててしまうのも、もつたいないことです。そこで私は、（ほこりやすすに汚れたところのご飯を）食べてしましました。（私が手をつけたからには、そのご飯を）もう、靈前へのお供え物にはできません」と。孔子は、（これを聞いて）言つた、「そうだつたのか。（そういう場合なら）私も食べるだろう」と。顔回は退出した。孔子は振り返つて弟子たちにむかつて言つた、「私が顔回を信じるのは、ただ今日だけのことではないのだよ」と。

解答

問1 子貢自レ井望^レ見之^一不^レ悦[、]以為^レ窃^レ食也。

（以為^レ窃食^一也。）

也可

問2 汝云^二うこと有りと雖も、以て疑わざるなり。

汝云^二ふ^一こと有りと雖も、以て疑はざるなり。

汝云^二えること有りと雖も、以て疑わず。

也可

問3 ほこりやすすが落ちたご飯をそのまま食卓に並べたならばきたないでしょし、だからといってそのご飯を捨ててしまうのも、もつたいないことです。

問4 靈に供える前に人間が食べてけがしたから。〔20字〕

問5 顔回への信頼が変わらない事を示すため。〔19字・解答例〕

顔回への信頼を示し弟子達の結束を図った。〔20字・別解例〕

書き下し文

呉の富陽県の董昭之、嘗て船に乗りて錢塘江を過りしどき、中央に一蟻の一の短蘆に著きて走る有るを見る。一頭より廻りて、復た一頭に向かひ、甚だ惶遽す。昭之曰はく、「此れ死を畏るるなり」と。取りて船に著かんと欲す。船中の人に罵る、「此れは是れ毒蟹どくせき」と。物にして、長ぜしむべからず。我當に之を踏み殺すべし」と。昭之意に甚だ此の蟻を憐れみ、因りて縄を以て芦を繋ぎて船に著く。船岸に至れば、蟻出づるを得。其の夜、一人を夢む、烏衣にして百許人を従へて來り、謝して云ふ、「僕は是れ蟻中の王なり。慎まずして江に墮ち、君の済活に慚づ。若し急難有らば、當に相告げ語るべし」と。歴ること十余年、時に所在に劫盜あり。昭之横錄せらるて劫主と為され、獄に余杭に繫がる。昭之忽思ふ「蟻王夢に、緩急あらば當に告ぐべしと。今何れの処に加之を告げん」と。結念の際に、同に禁を被むる者之を問へば、昭之具さに實を以て告ぐ。其の人曰はく、「但だ両三の蟻を取りて掌中に著いて、之に語れ」と。昭之其の言のごとくす。夜果たして烏衣人を夢みるに、云ふ、「急ぎて余杭山中に投すべし。天下既に亂れ、赦令久しからざるなり」と。是に於いて便ち覺む。蟻械を噛りて已に尽き、因りて獄を出づるを得たり。江を過りて、余杭山に投す。旋で赦に遇ひ、免かるるを得たり。

現代語訳

呉の（國の）富陽県の（人である）董昭之が、以前船に乗つて錢塘江を渡つていたとき、川の中ほどの所に一匹の蟻が一本の短い芦の茎につかまつて流れているのを見（つけ）た。（その蟻は）一方の端から（芦の縁沿いに）歩いて（行き、もう一方の端に着くと）再び（引き返して）一方の端に向かい、ひどくうろたえている（様子であった）。昭之が言うことには、「これ〔＝芦の上の蟻〕は死ぬのを怖がっているのだ」と（言つた）。（そこで、その蟻を、芦の茎から拾い）取つて船に乗せようとした。（それを見た）船の中の人々がどなり散らした、「これは（この蟻は）毒虫の類〔＝毒を持つていて、人を刺す害虫の一種〕で、生かしておくべきではない。私がこれを（確実に）踏み殺そう」と（言つた）。昭之は心の中で酷くこの蟻をかわいそうに思い、それで縄を（使って、その蟻の乗つて

（いる）芦に結びつけて船につないだ。船が岸に着くと、蟻は（生命の危険から逃れて陸に出ることができた。その夜のこと、（昭之は）一人（の人物）を夢に見たが、（その人物は）黒い衣服を身につけ百人ばかりの人を引き連れて（昭之の夢に現れて）きて、感謝しながら言うことには、「私は蟻の王である。（このたびは）不注意から（錢塘）江に落ち、あなたの救済に（遇うという失態に）面目なさを感じるものである。もしも（あなたに）差し迫った難儀が（起ころうとした時が）あつたら、ぜひとも（私に）知らせなさい」と（言つた）。時が経つこと十年余、折に（触れ、国中に）至るところに強盗が現れた。昭之は罪もないのに捕らえられて強盗の頭に見做されて、牢獄に余杭県でつながれる〔=余杭県にある牢獄に監禁されるはめになった〕。昭之はふと（いつぞやの夢に見た蟻の言葉を）思い出し、「蟻の王が夢に（現れて）差し迫った難儀があつたら知らせなさいと（言つたが）。今（その難儀に逢つているのだが）どこへこれ〔=自分に差し迫った難儀が降りかかったこと〕を知らせたらよいのだろう」と（思つた）。（そんなことを）一心に考え込んでいる時に、一緒に監禁されている者がこのこと〔=昭之が考え込んでいること〕を尋ねたので、昭之は細々とありのままを語つた。（昭之が話しこで）昭之はその言葉通りにした。（すると）その夜に果たして黒い衣服を身につけた人を夢に見ると、（その蟻の王が）言う、「急いで余杭山に逃げこみなさい。天下はすっかり乱れており、大赦の命令（が出来る）はそう遠いことではないのだ」と（言つた）。これを聞いた途端に（昭之は夢から）醒めた。蟻は（昭之の）足枷をとつくなみ切つており、それで牢獄から脱出することができた。（それから、昭之は錢塘）江を渡つて、余杭山に逃げ込んだ。そのうちに大赦に巡り会い、（処刑を）免れることができた（ということである）。

解答

問1 ①=生かしておく。 ②=危険から逃れて陸に上がる。「いずれも解答例」

問2 ごとくす

問3 書き下し文=若し急難有らば、當に相告げ語るべしと。

現代語訳=もし差し迫った難儀が（起こるような時が）あつたら、必ず知らせなさい。〔解答例〕

問4 烏衣

問5 蟻の恩返し〔5字・解答例〕

問1 単語の意味を限定する一語解釈の問題である。邦語では、漢字の意味を限定して使っているが、本来の漢語は、かなり広い意味を持つている。邦語でも、たとえば「たつ（立）」などは「垂直に起立する、現れる、発生する、出発する」などの意味を持つている。だいたい、これと似たようなものである。邦語においても、一語の意味を捉えるには、その語句にどんな修飾語が付いているか、どんな付帯説明、脈絡の中で使われているかなどを見ないと、正確にはつかめないだろう。漢文も同じである。

傍線部①は、まず直前の「昭之曰」の後の発言を見る。「此畏死也」とある。「此」は、この時点での話題を示すので、直前に出てくる「葦の茎の上を彷徨う蟻」を指しており、それが「死」を恐れていると昭之は考えている。そこで船に引き上げようとすると、同乗する乗客が言つた言葉が「此是毒蟻物、不可長。我當踏殺之」である。最初の「此」は、「此畏死也」の「此」と同じなので、「蟻」を指している。次の「是」は強意を示し、（ちょっと乱暴だが）邦語文語の「こそ」のようなものだと思つてよい。「毒蟻」は「毒を持った虫」という意味で、人間に危害を加えるものである。この部分を根拠として、「不可長」という帰結を得る。「不可」は「できない」という意味だが、それ以外にも「認（許）可しない」「つまり「認められない」の意味もあり、これは「させたくない、よくない」の意味になる。害虫ゆえに、何ができるない、何をさせたくない、何がよくないのかを考える。後続する「我當踏殺之」は、その帰結として述べられている。これは「今すぐ、この蟻を踏み殺してしまおう」と言つてゐるのだから、当然「生かしておくことはできない、生かすことが認められない、生かしておきたくない、生かしておくのはよくない」となるだろう。この発言に対して昭之は「甚憐此蟻」と感じたわけである。よつて、「長」は「命を長える」の意味で、「不可」長（命）を略したものと判る。「命を長える」だと、自然的な動作になり、邦語ではこれを禁止させる表現は不自然になるので、それを人の動作に変えるために意味の上から使役に採らねばならない。だから、書き下し文では「ちようぜしむべからず」と讀んでいるのである。使役の助字がないのに使役で読んでいるのは、漢文の本義ではなく、あくまでも邦語の都合なのである。直訳して「（命を）長らえさせておくことはできない」と答えてよいが、平易に言い換えて「生かしておくことはできない」と訳し、ここから傍線の付いていない「不可（ことはできない）」を外して「生かしておく」としたのが解答例である。

傍線部②も、考え方自体は同じである。傍線部を挟んで直前は「船至岸」と「船」の話をしており、直後は「其夜、夢一人」と「船」の話とは明らかに異なる。つまり、傍線部で「船」のエピソードは終わっているわけで、場面の転換が認められるわけである。従つて、文脈上からも、傍線部の後は無視してよいものと考えられる。「繩繫蘆著船」は、蟻の乗つた葦を繩で牽引していること

を意味する。次に「船至岸」とあり、船が岸に着いたのだから、当然、牽引されている「蘆亦至岸（蘆モまた岸ニ至ル）」わけである。葦が岸に着いた際に、「蟻得出」となるのだが、「得」は「手に入れる」の他に「できる」の意味もある。動詞を伴う場合は、後者の意味に採られることが多い。「蟻出」と主語・述語を抜き出して考えると、補語のないことに気がつくはず。それまで蟻は「蘆」の上にいたのだから、これは「蟻出於蘆」（蟻蘆より出づ）の意味で、訳すと「蟻は葦の葉から出た（葦の葉の上から下りた）」になるだろう。どこに「出た」かは、葦の到着場所、つまり「岸」に出たわけである。よって「蟻得出」は「蟻は、葦の葉の上から岸に下りることができた」と訳されるわけだ。従つて、解答としては「岸に降り立つた（上陸した）」と述べれば正解になる。解答例の「危険から逃れて」は、特に必要な要素ではない。これは「出」という動詞をいわば掛説的に捉えて、今まで生命の危険という「危機的な状況」にあつたのを「葦が岸に着くことで、危機を脱した（危機から抜け出た）」と使つたものであるからだ。

問2 助字の意味の把握。「如」は、さまざまな用法があるが、名詞を後置し、述語の位置に置かれた形、つまり「[名詞] 如[名詞]」という形を探った場合、これは比況（比喩）の文型を作り、「A、Bノ（ガ）ごとシ」と読まれる。「如」の他にも「若」も同様の機能を持つている。これは、よく知っているだろう。ここでも文型は、明らかに比況だが、これを短絡的に「ごとし」と答えると、落とし穴に落ちることになる。主語が「昭之」と人物になっている。「昭之、其の言のごとし」とすると、「昭之」と「言葉」が類似事象であることになる。人間は言葉ではないので、「其言」の指示語「其」は、直前の「但取兩三蟻著掌中、語之」というアドバイスを指している。つまり、昭之は「アドバイスの通りにした」という意味である。この意味の中の「の通りに」が「ごとく」の意味に相当するのだから、これに「した」という動作である意味を附加する、つまりサ変動詞を補つて「ごとくす」と読めばよいことが判る。

問3 書き下しの問題。句法の知識を活用すること。また、傍線部に関係する本文の他の部分も参照するとよい。傍線部「若有急難、當相告語」は、読点で二つに分かれ。このことは、傍線部が二つの句（節）から成り立つていてことを意味する。また、傍線部は「蟻王」が、昭之の夢の中で述べた言葉である。これに関しては、この後に昭之が「蟻王夢、緩急當告」と述べている。この部分の「蟻王夢」は、傍線部に含まれる発言に対する状況説明で、本文の「其夜、夢一人ノ僕是蟻中之王」を総括した内容に当たつ

ている。次の「緩急當告」が傍線部と同義の内容を述べている。ここに着目する。すると、ここで「緩急アラバ當ニ告ケベシ」と読んでいることが判る。「緩急アラバ」が「若有急難」に対応し、これが仮定句であることを示している。仮定の冒頭にある「若」は「もし」と読む副詞である。ここから、「若有」は「もし／＼アラバ」と読まれる。「急難」と「緩急」は文字は違えど、「急」は共通する。内容の位置関係でも、この二つは同義と見てよいだろう。すると一方が「緩急」と熟語で読んでいることから、他方も「急難」と熟語で読んでよいものと判る。よって、「若有急難」は、「もし／＼キゅうなんアラバ」と書き下せるはずだ。後続する語も対応する「蟻王夢、緩急當告」によつて、「當」は「まさニ／＼ベシ」と読む再読文字で、「告」は「つグ」と読まれる動詞であると判る。動詞の直前に前置される「相」は「あひ」と読まれる副詞であるから、「當相告」は「まさニ／＼あひ／＼ゲベシ」と読まれる。次の「語」は、「告」と同義語で、どちらも話す動作。つまり、同義を重ねて意味を明確にしているわけだ。また、「告語」という熟語はないから、これは分離して読むべきで、同義並列をしているものだと考えられる。つまり、これは「つゲかたル」と読めるわけだ。従つて、再読文字「當」は、「語」から返り、ここは「まさニ／＼あひ／＼ゲかたルベシ」と読まれることになる。ゆえに、この二つの部分をつなげ、「もし／＼キゅうなんアラバ、まさニ／＼あひ／＼ゲかたルベシ」と書き下せばよい。この問題では、全部を仮名書きでと指示がないから、「もし急難有らば、當に相告げ語るべし」と漢字仮名混じり文で書き下せばよい。なお、旧字体を新字体に改めてもよいが、本文が旧字体で、書き下しは原文の抜き出しのようなものだから、ここでは敢えて新字体にする必要はない。

枝問は□語訳の問題。「急難」がポイントで、後は書き下しさえできれば、□語訳は簡単なものである。「急難」は「突発的な難儀」の意味だ。「當に／＼べし」は「当然／＼しなければならない、すぐに／＼しなさい」の意味である。「相」は、強めの副詞で、あまり意味がない。つまり直訳すると、「もし突然、難儀があつたら、すぐに告げて話しなさい」になるだろう。これを答えると正解になるが、判りやすく碎いて、「もし突然、難儀がふりかかってきたら、すぐさま私に連絡して下さい」のように訳せばよいだろう。《解答例》も、この類似内容になつてゐるはずだ。

問4 文脈把握による空欄補充の問題で、極めて簡単。空欄の前後に「夜果夢

A

人、云」とあり、この「人」の形容（修飾）

が空欄部で、この人物は「夢」に出てくる人である。また、この部分の直前に昭之が蟻を取り上げて話しかけており、これは「蟻王夢、緩急」の昭之の発言を引いての行動である。つまり空欄部で修飾される人物は「蟻王夢」の「蟻王」である。さらに「夜果夢」と「果たして」があることから、それ以前に「蟻王」が出てくるはずだ。それは「其夜、夢一人」の部分で、これに続く部

分に「烏衣從百許人來、謝云」と説明されている。「蟻王」の形容をしている「烏衣ニシテ」の部分が、この空欄に当てはまるべき熟語と判る。「烏衣人」は、「真っ黒い着物を着た人」という意味。この「烏衣」が「蟻」を暗示しているのは、言うまでもなかろう。

問5

主題指摘の問題。このエピソードのテーマを指摘することになる。本文全体は、全部で四つの場面に分かれる。最初に「昭之が一匹の蟻の命を救った」ことが出てくる。次に「昭之の夢に蟻王が現れ、お札をしたい旨を告げる」場面が来る。次に、「昭之が冤罪で捕まつた際に、夢を思い出して、蟻に救いを求めた」場面が来て、最後に「蟻が助けてくれて、無事に昭之は逃げられて延命した」という展開を持つ。主要な登場人物（？）である「昭之」と「蟻（王）」を軸に考えると、「昭之が蟻王を助けたお札に、蟻王が昭之を助けた話」となろう。このような「助けたお札に助けられる」展開が「恩返し」譯である。恩返ししたのは、「蟻」の方なので、ゆえに、この話のテーマは、「蟻の恩返し」と五文字で答えられよう。制限字数が六字以内とあるのは、「恩」を仮名書きした場合の字数であろう。

●
メ
モ
●

【添削課題】

出典：福地櫻痴『言文一致』／京都大学 03年

文章略解

江戸時代には、公文書は誰にでも理解しやすい平易さを旨とし、また話し言葉は各家庭の教育によつて品位ある莊重さを保つていたため、両者に大きな格差はなかつた。しかし、ペリー来航を契機に書生出身者が多く登用されたこと、その後諸藩の英雄豪傑が要職に就いたことによつて、話し言葉は卑俗に、逆に文章は一般人には理解しがたいほど難解なものとなつた。今後、上流階級の人々は、一般人の模範となるような言葉遣いを心掛けるべきである。

解答

問1 A はなはだしい隔たりがあること。

B 反対の方向に進んでいくきっかけをつくること。

問2 明治維新以降、公文書は難解になつて一般の人々には理解が容易でないものとなり、逆に官吏の話し言葉は莊重さを失つて次第

に卑俗なものとなつたため、両者の乖離が進んだということ。〔85字〕

問3 ペリー来航に際して幕府が登用した人材の多くは書生出身であり、彼らの礼節を欠いた話し言葉と漢語を多用した文章が言文乖離の端緒を開いた。さらに明治維新以降、諸藩の英雄豪傑が政府の要職に就いたことがこうした状況に拍車をかけ、以上のような幕府・政府の動向に世間一般は倣つたに過ぎない、ということ。〔144字〕

問4 「武士詞」は各家庭が礼節に則った言葉遣いを子弟に教育した結果であり、話し言葉と書き言葉を近づける役割を果たした。

〔56字〕

問5 公人・学識者といった社会の上流に立つ人々は、平素の談話は言うまでもなく、公の発言においても一般大衆の模範となるべき

であり、話し言葉は品位ある莊重な言葉遣いを心掛け、文章においては一般大衆にも理解しやすい平易さを旨とするべきである。

〔115字〕

【問題】(自習)

出典：大西祝『批評心』／京都大学 前期日程 98年

文章略解

社会とは、その現状に対しての不平分子と、現状維持を願う保守的な人々とのバランスの上に成り立つものである。不平分子の言動はその時の社会にとっては危険だが、社会の変動のためには必要なものである。国家が存続しつづけるには、旧来の観念を墨守・弥縫するだけではなく、批評し、破壊していく必要がある。この批評心というものは、ひとたび起これば撲滅することは不可能で、性急に抑圧しようとするとさらなる社会不安を招く。

解答

問1 A＝社会状況が変化しないでいることを、安心できるよい状態だとは思えず、改革せねばならぬという危機感を強く感じる人であるということ。〔63字〕

B＝神聖であるとされている権力も、決まり切ったものとされている習慣も、いざれは批評心による批判の対象になるものであり、いつまでも神聖・固定のものではあり得ないということ。〔83字〕

問2 従前の動きの方向に変化を加える外からの力が加わらない限り、それまでと同じ動きをつづけるという物体の性質が惰性である。これと同様に、社会においても、それまでに進んできた方向に満足して自らは変えようと志すことなく、現状維持のみを願う保守的な人々が、今までの社会の動きを形成してきたということ。〔144字〕

問3 国家というものが、これからも永久に存続しつづけるための計略をたてるとするならば、それまでに存在していたその国の風習や儀礼や習慣などの状態をそのまま受け継いで守るのではなく、それらの存在意義を深く考究し、時流に照らして不要なものは破壊していく試みが必要であるということ。〔134字〕

問4 批評心といふものは、ひとたびその萌芽があると、撲滅しようとしても、その圧力に抗して生長するものである。したがつて、批評心による現状批判の危険性を恐れて性急に抑圧しても、さらに大きな社会変動へのエネルギーを醸成し、社会不安を招くことになるから。〔121字〕

問5 批評心とは、現状に満足せず、旧来の観念の矛盾を鋭く指摘する心である。社会は、保守的な人々と、この批評心を持つ不平分子との双方によつて成り立つものである。権勢が永いことを願うなら、時に応じて権勢を殺いでいく必要があり、そのためには批評心を抑圧しようとはせずに真正面から受け止めていくことが肝要である。〔149字〕

解説

問1 このような「意味」を問う設問の場合、「辞書的な意味」と「文脈の中での意味」との両面をにらみつつ解答を作つていくことが望ましい。

Aに言う「無事に苦しむ」は、辞書的に言い換えれば「何事もない状態」を「心苦しく思う」ことである。この傍線部分は「之に反して」（9行目）とされているように、その前の「かの所謂良民なる者」（6行目）と対比されている（問2の解説参照）。この「所謂良民なる者」がその時点での社会の状態に対して保守的であることを裏返せば、この傍線部分に言う「無事に苦しむ」とは、「社会が平穏な状態であることを快く思わない」という意味になる。この点が指摘できていればOK。

Bについては「豈に能く……んや」の漢文脈の解釈がポイントか。「豈に……んや」は反語の形で「……ということがあろうか、いや、ない」という否定の意味。「能く」は文字どおり「可能」の意味。だとすれば、「権勢が神聖であつても、習慣が固定的であつても、批評心の襲撃を免れることはできない」という意味になる。

問2 「比喩の意味を明らかにしつつ」という設問の指示に注意。傍線部分の直前に「物理上の比喩を用ふれば」（9行目）とあるように、ここで言う「惰性」という語が物理学用語であることが示されている。「惰性」とは元來力学用語で、物体の移動に際して外から新たな力が加わらない限り、それまでと同じ方向での動きを続ける性質を意味している。まずは、この「惰性」という語が比喩なのだということを解答において明示する必要があろう。

その上で「比喩の意味を明らかにする」とは、要するに「たとえているもの」と「たとえられているもの」との共通項を指摘することである。ここでは「社会の惰性」つまりは「社会がそれまでに動いてきた方向にそのまま従っていく」ということの指摘がほしい。これを、傍線部分に言う「彼等」の指示内容「かの所謂良民なる者」（6行目）の性質に合わせる形で解答を作っていく。「何気なく当時の社会の慣例を守りて、敢へて之に違背するの必要を感じざる」（7～8行目）・「保守の傾向」などの内容が含まれていればOK。

問3 傍線部分が、直前の「一時の安寧を偷むの策は之を弥縫する」（11行目）と対比されていることから考へる。この「之」とは、直前の「一国の風儀習慣」における「旧時の状態」を指す（①）。つまり、「一つの国において、「とりあえず安寧ならばいい」といふのならば「弥縫策」（綻びたところを部分的に取り繕う）でよいが、「永久であること」を望むならば、時として根本的な「破壊」をしなければならぬ……というのが傍線部分の趣旨である。この「破壊」とは、続く文中で「その風儀習慣の拠りて立つ所を穿鑿せん」（14行目）とあるように、その時点での社会での風儀習慣を筋道立てて検討する作業を伴うものである。この点での指摘も欲しい（②）。

以上①②が指摘できた解答ならば基本的にOK。

問4

前問との関連で考へていける。ここで筆者（＝大西）が「批評心」の必要性を述べているのは「国家」「社会」との関連においてである。このことを踏まえた上で、この「批評心」を抑圧すると「国家」「社会」が①なぜ、②どのようなダメージを受けるのか……を検討していこう。

①については、「批評心の一たびその萌芽を発してよりは、如何に之を撲滅せんとするも豈に長くそが生長を防ぐるを得んや」（18～19行目）とあるとおり、抑圧しようとしても抑圧しきれない本質を持つことが指摘できていればいい。

こう考えてみると②のポイントも見えてくる。つまり、本来的に抑圧できないものを無理に抑圧しようとすると、より大きな社会不安が生じてしまう、ということだ。前問で検討したような「社会変革の可能性」を封殺するということの愚に加えて、この点の指摘も欲しい。

問5

ここまで設問を解く過程で見えてきたように「批評心」とは、社会の現状に甘んじないで変革を志す心であり（問1のA・問3の解説参照）、それはその当時の社会の「風儀習慣の抛りて立つ所を穿鑿する」（問3の解説参照）、つまりは筋道立てて批判することを本旨とするものである。まずはこの点の指摘が欲しい（①）。

その上で、筆者（＝大西）はこの「批評心」をどうすべきだと述べているのか。「この批評心を抑圧するは決して策の得たる者にあらず」（14～15行目）とあるように、為政者がこの「批評心」を抑圧するのは得策ではなく、単なる弥縫策以上の「国家永久の計」を立てる（問3の解説参照）にはこの「批評心」を重視すべきである、ということだ。この点の指摘も欲しい（②）。

以上①②を含んで解答欄の枠内に入る解答がかけていれば基本的にOK。わかりやすい文を書くには、①②の二つに分けて書いてみるとよからう。

なお、《解答》は約百五十字で書いてみた。同じことを一百字で書くと《文章略解》のようになる。

L3T/L3TK/L3TF

難関国公立大国語／難関大国語 T
京大国語／難関大国語 T (京大)
一橋大国語／難関大国語 T (一橋大)



会員番号

氏名